

自由11

日本文化史における猿猴図の類型と変遷
の研究 ―まとめ：画像データベース構築の基礎
資料の提供―

都守淳夫（犬山市・愛知）

猿猴図データベースを構築する主要資料として
筆者は57機関の所蔵する19,797冊の売立目録の実
見から4,134種類の目録を同定識別し、その30%
にあたる1,276種冊から1,902件の猿猴図版を検索、
かつ同一作品の再出を除去した結果1,515件（作
家200名）の売立猿猴図版を選定した。これに東
京国博所蔵の狩野派絵画模写本群の整理分185名1,
126件（1989～92年東大美術史研究室科研費調査）
中の猿猴図12件、および本年度新たに東京大学東
洋文化研究所東アジア研究室保管の東京国博蔵狩
野派漢画模写本A5版写真カード、B-5キャビネッ
ト8本分（調査担当と調査年次は不明）の観察か
ら牧溪猿猴図の模写本を主とする25件の資料を加
えた。（調査は同研究室教授小川裕充氏の好意に
よる。なお同教授より狩野派和画模写本の写真カ
ードは東京大学美学美術史研究室に保管されてい
るとの情報もえた。近い時期に資料検索を行う。）

完成される猿猴図データベースには「猿猴捉月」
考の傍証資料として収集を始めた上記の古在資料
群に加えて館蔵品目録、展覧会目録、美術図録類
に掲載される現存作品の資料が加わる。この現存
作品に関する情報収集は本年より開始した売立猿
猴図の主題、時代、作家系譜による作品類型の決
定作業と平行して行なっている。現存作品は関連す
る古在資料群への基準指標となるもので、文化史
資料の構築には欠かせない。さて売立図版の類型
分類作業と評価は現在、作家「森狙仙作品」の4
88件と主題「猿猴捉月図」329件を終了している。

自由12

霊長類における左右上肢の反応の分化
木下昌也（鹿児島女子大・文・人間関係）

本研究ではニホンザルを用いて外的な左右の手
がかりが利用できない条件で左右のリーチング反
応が分化されるかどうかを調べた。今回は特に継
時的な反応の分化としての交替反応学習、および
分化強化を用いず行動を形成していく無誤学習の
手続きを応用した実験をそれぞれおこなった。

交替反応学習実験では呈示された餌に対して左
右の手を試行ごとに交互に出すという交替反応を
矯正法を用いて訓練した。交替系列からの逸脱数
をエラー数として記録した結果、被験体4頭中3
頭で片方の手のエラーが有意に多かった。これは
これらのサルが一方の手のリーチングに固執した
ことを示す。残りの1頭でのみエラー数の減少傾
向がみられ交替反応学習が認められた。

無誤学習実験では、3種類の餌を試行ごとに、
訓練期にはそれぞれサルの右側（右手で取りやす
い位置）、左側、中央に、テストではすべての種
類の餌を中央に呈示し、訓練期の餌とそれを取る
手の関係がテストでどの程度維持されるかを調べ
た。その結果3頭の被験体中2頭ではテスト期で
ほぼどちらか一方の手のみが用いられた。残りの
1頭でテスト初期に訓練期の手の使用がやや維持
されたが、後期には消滅した。やはりニホンザル
は一方の手に固執する傾向が強いといえる。

今回の研究からニホンザルが左右の上肢の反応
を分化できるという強い証拠は得られなかった。
今後は分化強化手続きを用いたもっと長期にわた
る訓練が必要であろう。